早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位審査論文　概要書

短期大学におけるストーリーマンガ教材化と「読み」の成立に関する研究

2023

山田　範子

1. 研究の目的と方法

1-1. 研究の目的

本研究の目的は、短期大学において、ストーリーマンガ（四コママンガやギャグマンガではないストーリー性のあるマンガ）が教材としてどのような価値を有し、マンガを読み合うことで学習者がいかに「読み」を成立させていくか明らかにすることである。また、本研究は、リメディアル教育としての側面もあることから、短期大学での実践を、高等学校をはじめとした国語科授業に逆照射し、「読むこと」の学習指導について新たな提言を行うものである。

短期大学の一例として、筆者の勤務校である金沢星稜大学女子短期大学部（以下、本学と記載）の学習者を研究対象とする。本学学習者は、文章教材に対する苦手意識が強く、他者と解釈を交流することや自分の解釈を構築することが困難な状況にあった。このような状況は、短大までの学校教育、特に高等学校国語科における主体的な言語活動の経験が乏しいことに原因があるのではないか。

解釈の構築は、学習者が学習材（教材）と対話することによって、主体的に言葉を紡ぎ出すところから出発する。佐藤（1995）は、教室には、学習材との対話、他者との対話、自己内対話の三つの対話が必要であると述べた。また、鶴田・河野（2012）は、学習材との対話が活性化されることで、他者との対話および自己内対話が促されると述べた。このように、学習材（教材）と対話することによって紡ぎ出された言葉は、他者と交流することによって、自己の内面への振り返りを促し、さらに新しい言葉を紡ぎ出していく。

国語教育の歴史では、文学（文章）教材を用いて教室における三つの対話を活性化してきた優れた先行研究が存在する。しかし、本研究において、このような先行研究と方向性と分離したのは、短大という2年間の教育課程に在籍する学習者の実態に即したところが大きい。短大のカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーには、教養やコミュニケーション力を身につけることが挙げられるが、学習者にとって苦手意識のある文章教材を用いてこれらの能力を短期間で伸ばすことに限界があった。そこで、教材のパラダイム転換を着想した。町田（2009）の先行研究などによって、文学教材として扱える可能性があることが明らかになっているストーリーマンガが、短大の学習者および短大にとっての教育のポリシーとどのように絡み合うか検討する。

このような背景をふまえ、マンガを教材として繰り返し学習者に与えた場合にどのような成果があるか、もし成果が見られるとしたら、短大を含む高等教育にとって、マンガが果たす役割とはどのようなものか、また、教材化したマンガを読み合うことで学習者がいかに「読み」を成立させていくか明らかにする。そのために媒材との対話のみならず、学習者同士の対話の詳細を発話分析等によって検討する。特に、マンガの読み深めに評論を介在させることによって、学習者のマンガの解釈がどのように変化するか、評論が学習者のマンガの解釈にどの程度寄与するのか、変化しない・寄与しない場合にはどこに障壁があるのか考察する。学習者のマンガの解釈に出てきそうにない、客観性の高い評論を介在させるという新しい試みによって、学習者がいかに自分の「読み」を構築させていくのか、つまずきがあるとしたら、どこに原因があるのか解明する。マンガ教材化の意義と学習者の「読み」の成立の過程が明らかになれば、短大に接続する高等学校をはじめとした国語科との関連性も濃厚になる。自信喪失に陥っている学習者に対するリメディアル教育としてのマンガの授業

の価値も明言できるだろう。

このように、本研究は、リメディアル教育としての側面も意識しながら、短大におけるマンガの教材価値とマンガを読み合うことで学習者がいかに「読み」を成立させていくかを明らかにするものである。

1-2. 研究の方法

本研究では、アンケート、先行研究および教科書の調査・分析によって整理した理論をふまえ、ストーリーマンガの「空所」に関する問いを解釈し合う授業と、マンガに評論を介在させた授業による学習者の反応を考察することを主な研究方法とする。

第 1 章第 1 節では、本研究の対象となる学習者に対するアンケート結果を分析し、なぜ読みの交流に困難が伴うのか、交流に至るまでのどこに課題があったのか考察する。また、学習者の読書嗜好の調査と高等教育におけるマンガ教材化の意義を考察する。第 2 節では国語教育史における文学教育を振り返り、第 3 節において、イーザーの読書行為論における「空所」概念と、文学教材の「空所」を読み合う学習の成果と課題を整理する。

第 2 章第 1 節では、マンガを短大の授業で活用するにあたり、学習者がマンガをどのような目標でいかに読むことができるか、高等学校国語科との関連性、国語教育の潮流、高等教育における活用のそれぞれの観点から考察する。高等教育に接続する中学校・高等学校において、マンガが教材としてどのように扱われているか第 2 節で調査する。第 3 節では、文学教材として扱ったマンガの先行研究を分析し、マンガの「空所」に関する問いについて読みの交流を行う指導過程モデルを作成する。

第 3 章と第 4 章は、第 2 章までに整理した理論をふまえ、具体的なストーリーマンガの授業を開発し、その実践を通して明らかになった課題を考察することを主な研究方法とする。第 3 章では、吉田秋生『海街 diary　蟬時雨のやむ頃』（小学館、2007）と松田洋子『ママゴト』（KADOKAWA、2011～2013）の「空所」を顕在化させ、読みの交流に誘導するための授業開発を行う。吉田秋生『海街 diary』の授業では、見開きページに二カ所描かれた月のコマを「空所」と捉え、ストーリーに即した分析的な意味づけを試みる。松田洋子『ママゴト』を用いた授業では、類似シーンを比較する問いを設定し、学習者の常識を否定する「空所」に注目しながら、ストーリーに即した意味構築を促す。小グループでの交流を経て、クラス全体で読みの交流を行う授業を提案し、成果と課題を考察する。

第 4 章では、ストーリー全体を学習者に提示できるマンガを用いた授業を開発し、実践を通して明らかになった成果と課題を整理し、考察する。赤坂アカ『かぐや様は告らせたい 10』（集英社、2018）では、作者も無意識か言葉にできないレベルの暗黙の約束事として捉えていると考えられる「マンガの文法」に注目し、学習者がマンガの文法を論拠とした解釈を交流できる授業を実践する。つげ義春『古本と少女』（筑摩書房、2008）の授業では、第 2 章で考案した指導過程モデルを活用し、テクストのメッセージ性を考えることで言語化された言葉を交流する。

第 5 章は、マンガの「空所」に関する問いについての読みの交流において、「他者との対話」を活性化できる要因を考察する。第 1 節では、いくえみ綾『プリンシパル』（集英社、2011）の原作マンガとノベライズを比較し、学習者自身が有効性を実感する「他者との対話」の在り方を検討する。第 2 節では、いくえみ綾『プリンシパル』の「空所」と考えらえる箇

所について対話し、観察者が対話の技能を評価する授業を行う。他者の発言を能動的に聞くための具体的な技術を考察し、マンガの「空所」を読み合う指導過程を再検討することを研究方法とする。

第 6 章は、ストーリーマンガの「空所」に関する問いを解釈し合う全 15 回の授業を 2 年継続して分析する。田島列島『子供はわかってあげない上・下』（講談社、2014）を教材として、学習者が指摘した「空所」について、12 の検討課題を作成し、1 回の授業で 1 つの検討課題の解決を目指すことを基本としながら、学習者相互にマンガを読み深める授業を行う。授業では、学習者がワークシートに書いた「はじめの解釈」を検討課題ごとに分析し、解釈をカテゴリー分けする。どのような解釈の磨き合いがあったか論述するために、学習者一人ひとりのはじめの解釈が、終わりの解釈においていかに変容したか分析する。

読みの交流を経た「終わりの解釈」の変容を「変容型」「持続型」「添加型」の 3 つの型に分類する。12 の検討課題のうち、変容型、添加型、持続型それぞれについて、分類された学習者が多かった上位 3 課題を抽出し、それぞれの変容のタイプに導いた問いの特徴と解釈の型の特徴を明らかにして、どのような読みの磨き合いが促されたか考察する。また、2020 年度の講義履修者 74 名を 1 番から 74 番までナンバリングし、相関図を作成して学習者がどのように影響を与えあったか可視化する。

第 7 章では、マンガに評論を介在させることで学習者のマンガの解釈がどのように変容するか分析することを研究方法とする。また、つまずきのある学習者に注目し、つまずきの原因が具体的にどのようなところにあるのか明らかにし、短大および高等教育におけるストーリーマンガ教材の位置づけを考察する。加えて、マンガから文章へ移行する国語科授業として、どのような授業が可能になるか展望する。

2. 論文の目次と構成

2-1. 目次

はじめに

序章　研究の意義・目的・方法

　第 1 節　研究の目的と意義

　第 2 節　研究の方法

　第 3 節　論文の構成

第 1 章　学習者の実態と授業で文学作品を扱う際の課題

　第 1 節　高大接続における文学作品の扱いの課題と展望

　　1.1　本研究の対象となる学習者の特徴

　　1.1.1　入試の状況

　　1.1.2　卒業後の進路

　　1.1.3　2010 年代の日本の短期大学と比較して

　　1.2　学習者が経験した高等学校国語科を中心とした読みの交流の現状

1.2.1　学習者の回答の分析
1.2.2　読みの交流に困難が伴う理由と克服の糸口
1.3　本研究の対象となる学習者の読書嗜好
1.3.1　学習者の回答の分析
1.3.2　学習者の実態に即した教材とは
第2節　読者中心の文学教育の成果
2.1　太田正夫の十人十色を生かす文学教育
2.2　大村はまの単元学習
第3節　国語教育における読みの交流
3.1　イーザーの『行為としての読書』を視座とした読書行為論の整理
3.1.1　イーザーは読書行為論において何を問題にしたか
－「空所」と「否定」の抽出－
3.1.2　読書行為論の読みの交流における意義
3.2　文学教材を読み合う学習の成果と課題
第2章　ストーリーマンガを授業で扱う意義
第1節　ストーリーマンガ教材化にあたって
1.1　「文学国語」での取り扱い
1.2　国語教育におけるリテラシーの潮流
1.3　高等教育とストーリーマンガの教材化
1.3.1　カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーとの関連性
1.3.2　これからの高等教育とストーリーマンガ
第2節　教科書における掲載マンガ調査
2.1　中学校・高等学校教科書に掲載されたマンガ教材
2.1.1　中学校国語科教科書における掲載マンガ調査
2.1.2　高等学校国語科教科書における掲載マンガ調査
2.1.3　国語科教科書における掲載マンガ調査のまとめ
2.2　主教材として扱われたマンガ教材の分析
2.2.1　四コママンガの成果と課題
2.2.2　四コママンガの特質から見えたストーリーマンガの可能性
2.3　教科書教材より抽出したストーリーマンガの可能性
2.4　総括
第3節　ストーリーマンガを文学教材として扱った先行研究

3.1　実践史の検討
3.1.1　国語教育におけるマンガおよびストーリーマンガの実践報告
3.1.2　ストーリーマンガを文学教材として扱った実践報告
3.1.3　実践報告の異同から考えるストーリーマンガの教材としての価値
3.2　読みの交流を中心としたストーリーマンガの指導過程モデル
第3章　ストーリーマンガの非言語表現を話題とした読みの交流
－互いの読みを認め合うことを目指して－
第1節　月のコマに焦点化した「問い」を起点とする読みの交流
－吉田秋生『海街 diary』（小学館、2007）を教材として
1.1　教材研究－学習者の現状に即したストーリーマンガ教材－
1.2　授業の実際
1.3　学習者の解釈と解釈に対する考察
1.4　総括と課題
第2節　類似シーンの比較を通した学習者の言語化能力と読みの交流
－松田洋子『ママゴト』（KADOKAWA、2011～2013）を通して考える
2.1　教材化の観点と教材研究
2.2　授業の実際
2.3　学習者の解釈と解釈に対する考察
2.4　学習者の感想から考える授業の成果と課題
第3節　ストーリーマンガを読み合う学習の可能性と課題
3.1　教材としてのストーリーマンガの特性
3.2　実践の課題
第4章　マンガの文法からテクストのメッセージ性へ昇華する読みの交流
第1節　高等教育で扱うマンガの文法
第2節　学習者が創造するストーリーマンガの文法－赤坂アカ『かぐや様は告らせたい10』（集英社、2018）の「空所」を巡って－
2.1　「空所」の再考
2.2　教材の価値と表現の特質
2.3　授業の実際
2.4　学習者の解釈と解釈に対する考察
2.5　根拠となるストーリーマンガの文法と教材化の基準

第 3 節　マンガの文法の意味づけからテクストの主題を探る－つげ義春『古本と少女』（筑摩書房、2008）の「空所」を読み合う－
3.1　教材の道徳的価値
3.2　授業の実際
3.3　マンガの文法（空所）を話題にした読みの交流
－第 2 回授業における学習者の解釈と解釈に対する考察－
3.4　テクストのメッセージ性（空所）を話題にした読みの交流
－第 3 回授業における学習者の解釈と解釈に対する考察－
3.5　ストーリーマンガの「空所」に関する「問い」の要件
第 4 節　実践の成果と課題
第 5 章　対話的学びを深めるストーリーマンガ－活性化の要因分析－
第 1 節　ストーリーマンガの「空所」はいかに他者との対話を活性化するか
－学習者の反応を通して考える－
1.1　学習者の反応調査
1.2　学習者が選んだ対話に効果的なテクスト
1.3　文章が対話に有効と考えた学習者の指摘
1.4　ストーリーマンガが対話に有効と考えた学習者の指摘
1.5　学習者の反応調査のまとめ
1.6　学習材との対話を促す可能性
1.7　他者との対話を促す可能性
第 2 節　ストーリーマンガを活用した対話の授業
－いくえみ綾『プリンシパル』（集英社、2011）を話題として－
2.1　『プリンシパル』教材化の意義とストーリーマンガによる対話
2.2　授業展開
2.3　学習者の解釈
2.4　対話の評価表
2.5　学習者の対話に対する感想の分析
2.6　学習者の解釈の変容と対話に関する評価
第 3 節　総括と今後の課題
第 6 章　ストーリーマンガの「空所」に関する問いは学習者の読みの磨き合いにどのように寄与するか　－学習者の自己内対話を可視化する－

第 1 節　短期大学部の授業でストーリーマンガを読む
1.1　現代教養Ⅲ（文学Ⅱ）の授業意図と目標
1.2　教材研究－田島列島『子供はわかってあげない上・下』（講談社、2014）－
第 2 節　検証方法
2.1　全体の指導過程
2.2　一回の授業における指導過程
2.3　はじめの解釈のカテゴリー分類
2.4　終わりの解釈における反応型の分類
2.5　磨き合いの方向性に即した検討課題の抽出
2.6　ナンバリングと相関図の作成
第 3 節　「空所」に関する問いを解釈し合った結果
3.1　カテゴリー分類した学習者のはじめの解釈
3.2　終わりの解釈における学習者の反応型の割合
3.3　変容型の多い検討課題に注目した分析
3.3.1　2020 年度と 2021 年度の比較
3.3.2　磨き合いの妥当性
3.4　持続型の多い検討課題に注目した分析
3.4.1　2020 年度と 2021 年度の比較
3.4.2　磨き合いの妥当性
3.5　添加型の多い検討課題に注目した分析
3.5.1　2020 年度と 2021 年度の比較
3.5.2　磨き合いの妥当性
3.6　相関図から見る学習者の読みの磨き合いの詳細
第 4 節　ストーリーマンガの「空所」の解釈と学習者の相互作用の考察
4.1　学習者のはじめの解釈の多様性と読みの交流
4.2　解釈の型から考える学習者相互の読みの磨き合い
4.2.1　どのような「問い」が学習者の解釈を変容させるか
4.2.2　解釈の型の特徴と読みの磨き合い
4.3　学習者の自己内対話の可視化
第 5 節　総括
第 7 章　評論テクストを介在させることでストーリーマンガの解釈はどう変容するか

第１節　問題の所在と目的
第２節　教材について－平和を考えるためのストーリーマンガと評論－
2.1　こうの史代『夕凪の街』（双葉社、2004）のマンガ表現の評価と分析
2.2　中田健太郎「世界が混線する語り」『ユリイカ』（青土社、2016）の文章表現の評価と分析
第３節　学習者の実態－読書嗜好と関連づけて－
第４節　授業展開
4.1　全体の授業展開
4.2　ストーリーマンガの授業概要
4.3　評論の授業概要
第５節　学習者の実際の発言とプロトコル分析・考察
5.1　被害者と加害者の対立を安易に固定化しないことに対する議論
5.1.1　火曜日5班の反応プロトコル
5.1.2　金曜日１班の反応プロトコル
5.2　「原水爆禁止世界大会」のビラが風に吹かれているイメージに対する議論
5.2.1　金曜日6班の反応プロトコル
5.2.2　水曜日２班の反応プロトコル
5.3　学習者の解釈の変容－「他者との対話」によって促される読みの磨き合い－
第６節　学習者の解釈の変容に対する評論テクストの寄与
－学習者の「自己内対話」からの考察－
第７節　評論テクストを介在させることによって、学習者の解釈は変容するか
7.1　学習者の授業評価
7.2　授業者から見た学習者の授業評価と考察のまとめ
第８節　つまずきのある学習者の実態と支援
8.1　つまずきのある学習者へのインタビュー
8.2　高等教育の教養科目におけるストーリーマンガの位置づけ
第９節　今後の展望－専門科目と中高への接続－
終章　研究の成果と課題
第１節　研究の成果
1.1　他者との対話を促すストーリーマンガの「空所」
1.2　コミュニケーションに対する自信を深めるストーリーマンガを読み合う学習

1.3　ストーリーマンガによる3方向の読みの磨き合いと自己の考えの形成
1.4　抽象的な言葉の具体化によるイメージの共有
第2節　今後の課題と展望
2.1　ストーリーマンガの教材選択
2.2　マルチモーダル・テクストとしてのストーリーマンガ
2.3　中学校・高等学校における活用可能性
おわりに
初出一覧
文献一覧

2-2. 論文の構成

本論文は、序章、本論（1章～7章）、終章で構成されている。

本論は、アンケート、先行研究および教科書の調査・分析を整理したパート（第1章と第2章）、マンガの「空所」に関する問いを解釈し合う学習を中心に据えた授業を開発し、その成果と課題を考察したパート（第3章と第4章）、マンガの「空所」における問いについて読みの交流をすることで、他者との対話を活性化させる要因を考察したパート（第5章）、マンガの「空所」を教材化し、どのような解釈の磨き合いを促すか考察したパート（第6章）、マンガに評論を介在させた授業による学習者の反応から、高等教育におけるマンガ教材の価値と学習者の「読み」の成立を総括的に考察したパート（第7章）から成る。

ここでは、序章と終章を除く本論の全7章の概要を示す。

第1章　学習者の実態と授業で文学作品を扱う際の課題

本研究の対象となる学習者の実態・特性を明らかにし、読みの交流がいかに学習者の実態に即して課題を解決していくことができるか考察することを目的とした。

第1節では、本学の設置者・学校法人稲置学園が調査したデータである「FactBook 2020年度事業報告」と金沢星稜大学女子短期大学部ホームページを用い、学習者の特性を調査した。また、平成30年度私立短期大学教務関係調査および佐藤（2018）の指摘をふまえ、他の短期大学と比較することによって、本学学習者の位置づけを考察した。この結果、本学は人物重視の入試形態で入学する学習者が多いこと、自県内入学率や自県内就職率が非常に高いことが明らかになった。

学習者の高等学校までの国語科授業の実情と読書嗜好を調査するため、アンケートを実施した。高等学校国語科における文学作品の読みの交流では、一見、交流が行われているように見えても、実際は教員が用意した一義的な解釈に誘導する傾向があることを確認した。また、学習者の読書嗜好として、ストーリーマンガを好意的に捉える傾向が強いことが明らかになった。

第2節では、国語教育史において、教員が一義的な解釈に誘導する読解指導と対照的な立場にあった太田正夫の「十人十色を生かす文学教育」、大村はまによる学習者に文学的体験をさせるための単元学習に焦点をあて、その成果を考察した。文章教材によって、教室に必

要な三つの対話である「学習材との対話」「他者との対話」「自己内対話」すべてを活性化できることを確認した。また、学習者に文学作品を楽しんで読ませ、鑑賞させるためには、その実態に応じた教材を用いる必要があることが明らかになった。

第3節では、イーザーの読書行為論における「空所」概念と、文学教材の「空所」を読み合う学習の成果と課題を整理した。イーザーは、その意味を巡って読者が想像力を働かせなければならない箇所を「空所」と呼び、その「空所」は読者の常識を「否定」することによって、読者との相互作用を促すと述べた。このような「空所」概念を取り入れた先行研究に注目したところ、文学教材を読み合うことで、学習材との対話を活性化することが明らかになったが、他者との対話を促す成果は十分でないと考えられた。

以上の調査をふまえた考察より、本学学習者にとって、他者との対話を促す授業が必要であり、読書嗜好に合致したストーリーマンガを教材として扱うことによって、学習者が読みの交流を楽しむことができる可能性が示唆された。

第2章　ストーリーマンガを授業で扱う意義

第1節は、マンガを教材化した場合、どのような目標において、いかに読むことができるか考察することを目的とした。高等学校国語科「文学国語」の学習指導要領、OECD（経済協力開発機構）によるPISA調査と大学入学共通テストを照合したところ、絵・コマ・言葉で構成されるマンガが複数の形象を読み取るという目標および解釈の多様性を考察しながら読むことができる可能性が明らかになった。また、本学のカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーを取り上げ、高等教育におけるマンガ教材の意義を考察した。その結果、高等教育でマンガを読み合うことは、他者との対話を促し、コミュニケーション力に働きかける可能性があることが示唆された。

第2節では、マンガがどのような教材として機能する可能性があるか考察することを目的として、中学校・高等学校国語科の教科書におけるマンガの取り扱いについて調査した。平成元年以降の中学校国語科教科書および平成15年以降の高等学校国語科教科書を調査したところ、四コママンガが、学習者に授業の目的を達成させるための主たる教材（主教材）として扱われる傾向が強いことを確認した。しかし、四コママンガに描かれるシンプルな画像では、画像の理解およびその理解を表現できることの育成にとどまる恐れがあった。一方、ストーリーマンガは、多くの形象を根拠として、ストーリーに即した多様な意味構築ができることが明らかになった。

第3節では、実際に短大の授業でマンガを活用できるようにすることを目的として、マンガを文学教材として扱った先行研究を調査した。指導過程を分析した結果、マンガの文法という特有の決まりに関する「空所」を話題にすることによって、他者との対話を高められる可能性があると考察した。先行研究の成果を応用し、「空所」にあるマンガの文法を話題とした読みの交流を行い、徐々に話題の抽象度を上げ、最終的にマンガのメッセージ性を話題にした読みの交流を行う指導過程モデルを作成した。

ストーリーマンガは、国語科と親和性があり、特に本学のディプロマ・ポリシーに記載されているコミュニケーション力や協調性を養いながら自己の考えを構築できる教材である。高等教育において十分活用可能な教材であることが明らかになった。

第 3 章　ストーリーマンガの非言語表現を話題とした読みの交流
－互いの読みを認め合うことを目指して－

ストーリーマンガ教材を開発し、短大の授業で実践することを通して、どのような成果と課題が見られるか考察することを目的とした。

松本（2015）は文学教材の「空所」に関する問いを立てることが読みの交流を促す契機となると報告したが、この研究成果をふまえ、マンガの文法に関する「空所」について問いを設定することを試みた。吉田秋生『海街 diary　蟬時雨のやむ頃』と松田洋子『ママゴト』を教材化して実践したところ、学習者が複数の妥当な解釈を生み出せることを確認した。また、学習者が読みの多様性に気づいたことで、互いに解釈の自信を深め、読みの交流を楽しむことができた。

マンガは、絵の描き方がストーリー全体とどのように関わっているのか捉えやすく、内容と形式を結び付けて考えやすい。このため、すべての学習者が自分なりの解釈を構築することができた。考えを構築できたことで、他者との読みの交流に対して障壁がなくなった。また、読みの交流を通して、学習者相互に言葉による表現を高めながら、複数の妥当な解釈を交流することができた。

このようなストーリーマンガの教材特性と実践の成果が明らかになった一方で、マンガを教材化する場合、ストーリー全体を確実に読むことのできる完結した作品を内容的価値の精査とともに選ぶ必要があるという課題を見出した。

第 4 章　マンガの文法からテクストのメッセージ性へ昇華する「読みの交流」

マンガの文法に関する「空所」について問いを設定した授業の成果と課題をふまえ、第 2 章で考案した指導過程モデルを活用したストーリーマンガの授業実践を行い、再度、その成果と課題を考察することを目的とした。

19 ページの短編でストーリー全体を読むことができる、赤坂アカ『かぐや様は告らせたい 10』第 95 話を教材化し、読みの交流を行った。その結果、学習者からストーリーに即した多様な解釈を引き出すことができた。さらに、学習者の解釈とマンガ表現学の知見が一致するものが多数存在した。マンガ表現学では、作者が無意識のレベルで描いた表現技法をマンガの文法として理論化しているが、この理論を知らない学習者が、「空所」を意味づける際に紡ぎ出した言葉がマンガの文法と一致するとき、根拠に妥当性が加わった。実践を通して、隣り合うコマが一見無関係であるコマ（コマ群）やストーリー展開に影響を与えないコマ（コマ群）の中で、マンガ表現学による意味づけがある程度できる部分をマンガの「空所」とする教材研究の要点を見出した。

次に、つげ義春『古本と少女』を通して、第 2 章で考案した指導過程モデルのすべてを実践にあてはめ、読みの交流をするときの問いを、マンガの文法からテクストのメッセージ性まで高めることを試みた。この結果、実践レベルで指導過程モデルを扱えることが明らかになり、マンガの文法からテクストのメッセージ性に昇華するような問いを段階的に学習者に与え、解釈を交流していくことによって、学習材との対話および他者との対話を相乗的に促す可能性が高いと考えられた。

これらの授業実践の課題として、学習者の読みの交流がどのように行われたのか、どのように互いに読みを磨き合ったのか、その実態を明らかにすることができなかったことが挙

げられた。また、教材の価値を十分に明らかにできなかったこと、「空所」を学習者に探究させる手続きをとっていなかったことも課題と捉えられた。

第 5 章　対話的学びを深めるストーリーマンガ－活性化の要因分析－

第 5 章では、マンガの「空所」に関する問いが他者との対話を活性化することが示唆されたが、何をもって活性化とするのか、学習者がどのような他者との対話に有効性を見出すのか明らかにすることを目的とした。

第 1 節では、学習者の反応調査を通して、学習者自身が有効性を実感する他者との対話の在り方を考察し、マンガの「空所」を問いとした読みの交流が他者との対話を促す可能性について考察した。約 70%の学習者が、文章と比較してマンガの方に有効性があると判断した。中でも、「マンガを読んで理解できたことから想像・解釈したことを互いに発展させることの有効性」を指摘する傾向が強かった。第 3 章と第 4 章で報告した授業実践において、自分の解釈に自信を持って読みの交流に臨む学習者が劇的に増えた状況は、マンガの「空所」を解釈し合う学習が、学習者の求める他者との交流を促したことが関係していると推測できた。学習材との対話をある程度活性化しつつ、有効性を実感する他者との対話を顕著に活性化でき、その活性化をもって、学習者はより深い対話的学びに到達できることが示唆された。

第 2 節では、いくえみ綾『プリンシパル』を読み、「作者のメッセージを読み取れるところ」「表現に作者の意図を感じるところ」について対話し、観察者が聞き手の技能を評価する授業を行った。「相手の考えを解釈して自分の言葉で述べなおす」、「質問して、相手から話を引き出す」ことの二点が対話を聞く技能の中で難易度が高いことが明らかになった。学習者相互に対話を観察したことによって、他者の発言を能動的に聞くことの課題を発見することができた。クラス全体の読みの交流に拡大する前段階として、少人数グループでの対話を経験させ、能動的に聞くことを学ぶ指導過程の必要性が明らかになった。この指導過程をふまえることで、マンガの「空所」を話題とした読みの交流では、特に他者との対話を促し、自己内対話に導く可能性が示唆された。

第 6 章　ストーリーマンガの「空所」に関する問いは学習者の読みの磨き合いにどのように寄与するか　－学習者の「自己内対話」を可視化する－

ストーリーマンガの「空所」に関する問いについて、どのような読みの交流があったか、どのように互いに読みを磨き合ったのか明らかにすることを目的とした実践を行った。田島列島『子供はわかってあげない上・下』の「空所」を学習者自身が探究し、「空所」について読み合う全 15 回の授業実践を二年分分析した。

まず、読みの交流の実態を明らかにするため、学習者がたてた「空所」に関する問いにおける「はじめの解釈」を分類し、読みの交流を経た「終わりの解釈」がどのように変化するのか、ワークシートに記載された内容を分析した。その結果、「終わりの解釈」のパターンを変容型（自分のはじめの解釈が変容するタイプ）、持続型（他者の解釈を聞いて納得・共感したが、自分のはじめの解釈は変わらなかったタイプ）、添加型（他者の解釈を聞いて、その解釈を添加し、自分のはじめの解釈がより深くなったタイプ）に分類できた。また、学習者一人ひとりが互いにどのように影響を与え合ったか可視化するため、2020 年度の学習

者を 1 番から 74 番までナンバリングして相関図を作成した。相関図より、どの学習者も平等に解釈が認められるチャンスがあったことが明らかになった。このように、『子供はわかってあげない上・下』を 2020 年度 74 名、2021 年度 66 名の学習者で読み合ったところ、考えを改める方向（変容型）、自信を強める方向（持続型）、考えを深める方向（添加型）それぞれの読みの磨き合いが促されたことが明らかになった。また、学習者一人ひとりに注目したとき、それぞれの学習者が他者から影響を受けたことが明らかになった。

次に、どのように互いに読みを磨き合ったのか明らかにするため、解釈の変容パターンを規定する「問い」の特徴があるか分析した。変容型を多く生み出した問いは、考えがいがあり、画像を中心としたマンガ特有の表現を解釈の根拠とする傾向が強く、他者の考えを理解することによって自分の解釈の更新を促す特徴があると考えられた。持続型を多く生み出す問いは、難易度が高く、文字言語を中心としたマンガ表現の複数の具体的な形象を解釈の根拠とする傾向があり、他者の考えを共感することによって、自分のはじめの解釈を維持しながら他者の解釈を認めることを促した。添加型を多く生み出す問いは、主に画像を解釈の根拠として、他者の画像由来の根拠を含め、他者の解釈の道筋が自分と共通していたり、異なっていたりすることを理解できることによって、自分のはじめの解釈に他者の解釈を付け加えることを促すと考察した。ストーリーマンガの「空所」に関する問いは、特徴的に３つの変容パターンを生み出し、読みの磨き合いを支えていることが明らかになった。

どのように磨き合いを促すかという点では、変容型では、他者から画像を中心としたマンガ特有の新しい視点や視野の広がりを示唆されること、持続型では、他者から文字言語を中心としたマンガ表現の複数の具体的な形象という明確な根拠を示されること、添加型では、他者からはじめに持っていた自己の解釈の根拠を具体化されることが関係していると考えられた。学習者個人に注目したところ、ほぼ同様の磨き合いの過程があることが可視化でき、それぞれの変容パターンにおいて、自己内対話が促されたことが明らかになった。

第 7 章　評論テクストを介在させることでストーリーマンガの解釈はどう変容するか

評論を介在させることによって、学習者のマンガの解釈がどのように変化するか、評論が学習者のマンガの解釈にどの程度寄与するか、変化しない・寄与しない場合はどこに障壁があるのか明らかにすることを目的とした授業を行った。

まず、マンガの解釈を交流した後、評論を読み合った授業におけるグループワークにおいて記録された反応プロトコルを分析した。その結果、学習者相互にマンガを読み合ったときには出てこなかった評論の解釈を一旦受け入れられること、あるいは学習者が互いに評論の受容を確認し合うことがきっかけになり、考えの変容が起こることが多いことが明らかになった。また、読みの磨き合いは、他者とイメージの共有ができたときに促されると考察した。

次に、学習者が書いた批評文を自己内対話として捉え、評論を介在させた際にどの程度学習者のマンガの解釈に影響を与えるか考察した。その結果、評論の介在によって学習者の書いた文章の約 68%に影響を与え、評論が学習者のマンガの解釈の変容に寄与することが明らかになった。

最後に、マンガの解釈が変容しなかった学習者に注目し、どこにつまずきがあったのか考察した。その結果、読むことに対する煩わしさと内容を理解できないことが意欲低下に結び

ついていると考えられた。評論の抽象表現を他者に具体化されるというイメージの共有があることによって、読みの磨き合いが促されることが明らかになったが、つまずきのある学習者は自分の言葉で言い換えることが難しいため具体化しにくく、他者の具体化にも鈍感であることが示唆された。

以上のことから、短大の教養科目の中でマンガという具体的形象を含む易しい教材から、理解に基づく議論を経験させる必要があることが明らかになった。マンガを用いた議論は、特に他者との対話を活性化でき、本学および高等教育全般に求められるコミュニケーション能力を育成できる。文章教材に対する苦手意識を持つ学習者にとって、先にマンガを読み合うことによって、理解に基づいた自己の解釈をある程度確立できる自信と、他者と解釈を交流することのおもしろさを実感させることができる。学習への高い意欲を保った状態で評論などの文章教材に移行していけば、校種に関係なく多くの学習者が、評論の筆者も含めた他者と、より深い読みの磨き合いを経験し、自分の読みを確立できることが明らかになった。

3. 研究の成果と課題

本研究の目的は、短期大学において、ストーリーマンガが教材としてどのような価値を有し、マンガを読み合うことで学習者それぞれがいかに「読み」を成立させていくか明らかにすることであった。研究を経て、マンガ教材は、他者との対話を促すことによって、高等教育の教育課程に必要なコミュニケーション力や協調性を養いながら、自己の考えを構築する力を育成できる価値があることが明らかになった。また、マンガの画像を中心とする具体的な形象を介して他者とイメージが共有できた際に「他者から視野の広がりを示唆されたことによって、自分の考えを改める方向」、「他者から解釈そのものやその根拠を明確にされたことによって、自分の考えに自信を持ち、さらに強める方向」「自己の解釈の根拠を他者に具体化されることによって、自分の考えを広げ、深める方向」といった 3 方向の読みの磨き合いが促され、自分自身の「読み」を成立させていくことが明らかになった。

以下、研究で明らかになった成果と課題について、述べていく。

3-1. 研究の成果

(1) 他者との対話を促すストーリーマンガの空所

読者中心の文学理論家であるイーザーは、その意味を巡って読者が想像力を働かせなければならない箇所を「空所」と呼び、その「空所」は読者の常識を「否定」することによって、読者との相互作用を促すと述べた。国語教育では、松本(2015)、桃原(2010)、西田(2019)らがイーザーの「空所」概念を取り入れた先行研究を行っており、文学教材を読み合うことによって、学習材との対話を活性化することが明らかになったが、他者との対話を促す成果は十分でないと考えられた。ストーリーマンガは四コママンガのように定型がなく、画像を中心とした具体的形象が豊富である。多様な「空所」が存在するとともに、その「空所」を意味づけする際の根拠を見つけやすい。学習者の解釈が複数見込めることから、読みの交流を活性化できる可能性を見出した。その関係において、「空所」にあるマンガの文法に関する問いから徐々に話題の抽象度を上げ、グループレベルでの対話を経験しながら最終的にマンガのメッセージ性に昇華する読みの交流を行う指導過程モデルを作成することができた。

吉田秋生『海街 diary　蟬時雨のやむ頃』、松田洋子『ママゴト』、赤坂アカ『かぐや様は告らせたい 10』、つげ義春『古本と少女』について、指導過程モデルを用いた授業を行った。その結果、読みの交流において、学習者から多様な解釈が出されることを確認した。また、本研究の対象となる学習者が求める他者との対話が「自分と対話する相手がともにストーリー全体を理解し、理解したことから生じた想像・解釈をお互いに共感しながら練り上げていく」タイプのものであると考察できた。具体的形象があるマンガは、視覚を通して他者の解釈を理解できるため、他者の考えを共感しやすいからである。

マンガの文法からテクストのメッセージ性に昇華するような問いを段階的に学習者に与える指導過程モデルは、学習材との対話だけでなく、学習者が求める他者との対話を促すことが明らかになった。

(2) コミュニケーションに対する自信を深めるストーリーマンガを読み合う学習

2020 年 3 月に内閣府が報告した「企業の採用活動に関する実態調査」によると、「コミュニケーション能力が高い」、「協調性がある」学生を採用したいと考える企業が非常に多い。また、本学のディプロマ・ポリシーにも、コミュニケーション力と協調性が身についていることが挙げられる。マンガを読み合うことは、共感的な他者との対話を促し、コミュニケーション力や協調性に働きかけるため、高等教育における学習価値がある。ただし、学習者によるマンガの解釈の交流は、多様性があるものの客観性が不足する。一方、評論には豊富な引用に基づき、学習者のマンガの解釈の交流では出てきそうにないハイレベルかつ客観的な指摘があり、学習者の思考を揺さぶることができる。このように、マンガを読み合った後で評論（文章）を読み合う授業展開を教養科目に位置づけることで、他者とともに多様な価値観に触れ、共感的にコミュニケーションできる力を強化できることが明らかになった。

高等学校までに培われるべき能力が身につかず、自信喪失に陥っていた短大生がマンガを読み合うことによって、その傷が癒されたことから、リメディアルとしての側面が見出された。高等学校をはじめとする国語科授業に逆照射すると、先にマンガ教材による読みの交流を経験することで自己の解釈をある程度確立できる自信と、他者とコミュニケーションすることのおもしろさを実感させることができる。学習者の意欲を高く保った状態で評論などの文章教材に移行していけば、校種に関係なく多くの学習者が自分の読みを確立できることが明らかになった。

(3) ストーリーマンガによる3方向の読みの磨き合いと自己の考えの形成

田島列島『子供はわかってあげない』を教材とした際、考えを改める方向（変容型）、自信を強める方向（持続型）、考えを深める方向（添加型）それぞれの読みの磨き合いが促されたことが明らかになった。また、学習者一人ひとりが他者から影響を受けたことが明らかになった。

変容型では、他者から画像を中心としたマンガ特有の新しい視点や視野の広がりを示唆されること、持続型では、他者から文字言語を中心としたマンガ表現の複数の具体的な形象という明確な根拠を示されること、添加型では、他者からはじめに持っていた自己の解釈の根拠を具体化されることが関係していると考えられた。学習者個人に注目したところ、ほぼ同様の磨き合いの過程があることが可視化でき、それぞれの変容パターンにおいて、自己内対話が促されたことが明らかになった。

このように、ストーリーマンガの「空所」を読み合う学習が、学習材との対話だけでなく、

他者との対話および自己内対話へと導き、自己の考えの形成を促すことが明らかになった。文学教材を用いた先行研究では、学習材との対話を活性化することが明らかになっていたが、マンガ教材を用いた本研究によって、学習材との対話から、さらに他者との対話および自己内対話を促すことが明らかになった。先行研究とは別の視点で自己内対話への深まりを述べることができた。

(4) 抽象的な言葉の具体化によるイメージの共有

マンガを読み合った後で評論を読み合う授業において、評論の筆者という新しい解釈者を介在させることによって、学習者の「読み」がどのように成立していくか明らかにした。学習者が書いた批評文の分析より、評論が学習者のマンガの解釈の変容に寄与することが明らかになった。また、反応プロトコルより、他者の考えが自分の考えと異なるものであっても、明確な解釈の根拠を部分的にでも納得できたとき、他者とイメージを共有することができ、読みの磨き合いが促された。

マンガ教材は画像を中心とした具体的形象があることによってイメージを共有しやすいが、文章教材の読みの磨き合いは、他者から抽象的な言葉を具体化されることによって、イメージの共有につながる。このような他者との対話の過程があるからこそ、自己内対話が促され、学習者一人ひとりの「読み」を構築していくことが明らかになった。

3-2. 今後の課題と展望

(1) ストーリーマンガの教材選択

教科書に掲載されていないマンガをあえて教材とする場合、膨大な数の市販品の中から完結作品を調査し、それらをすべて読むことは困難である。第4章の赤坂アカ『かぐや様は告らせたい10』の実践を通して、マンガの「空所」がどのような場所にあるかある程度見当をつける方法を見出したが、一つの授業実践から見出した視点であったため、妥当性が不十分であった。今後は、マンガ表現学を中心としたマンガ研究に学び、マンガ表現と学習者が指摘する「空所」にどのような接点があるのか研究を進める必要がある。

また、マンガは教育的観点からふさわしくない内容のものが散見される。学習者に読ませるからには内容に価値があることが求められるが、本研究ではその判断基準を明確にすることができなかった。今後の課題として、「空所」に関する問いを解釈し合う学習に適したマンガ一覧を作成し、概念化に取り組みたい。概念化には、後述する学習者につけたい力とマンガの教材としての価値の関係性にも言及する必要がある。

(2) マルチモーダル・テクストとしてのストーリーマンガ

羽田（2019）は、「『マルチモーダル・テクスト』とは、複数の『モード（mode)』によって構成されたテクストのことである」(p. 14) と説明している。ストーリーマンガは、映像テクストと文字テクストの二種類のモードを基本として構成されるため、マルチモーダル・テクストと言える。マンガの映像テクストは、連続するコマや吹き出しの組み合わせが無限にあると考えられるため、絵本やアニメなどの他のメディアに比べて、映像テクストの幅が広く、その数が非常に多いという特徴を持つ。また、文字テクストには、地の文、登場人物のセリフや内言以外に、オノマトペなどを視覚化した「描き文字」がある。かとう（2014）は、音の大小を文字の大きさで表現することに加え、描き文字を「音にふさわしい形に描くこと」(p. 98)、コマの中の「どの位置でどのような方向に置けばより効果的なのか」(p. 99)

を検討することの必要性を述べている。このように、マンガの文字テクストには、映像テクストを兼ねるものが存在する。第3章で報告した吉田秋生『海街diary1・蟬時雨のやむ頃』の授業では、「みーん、じー」というオノマトペを文字テクストとして解釈の根拠とする学習者がいたが、その大きさや形状、位置といった映像テクストとしての効果に注目するとさらに新しい解釈が得られると考えられる。

倉澤（1974）は「読むということは、活字を読むということばかりではなくて、活字以外のものまでも認識することを言うのではないか」（p.128）と述べた。マンガは、活字および活字以外の表現（映像テクスト）が他のメディア以上に多様であると考えられることから、学習者の豊かな読みを創造できる。本研究では、解釈の根拠に画像を中心とした具体的形象が役立つことを明らかにしたが、今後、マンガがマルチモーダル・テクストとしていかに活用可能か検討することで新たな授業の方向性が見出していきたい。

（3）中学校・高等学校国語科における活用可能性

マンガに評論を介在された授業は、中学校・高等学校の学習指導要領との対応も期待できるため、具体的にどのように扱っていくか考える必要がある。中学校では、平成29年告示学習指導要領に新設された「C読むこと」の「考えの形成」と「共有」の指導事項を押さえる授業展開が可能になると考えられる。また、高等学校でも、平成30年告示学習指導要領「現代の国語」「文学国語」における「C読むこと」領域の「考えの形成」と「共有」の指導事項が扱える範囲に入ってくる。特に、論理的文章を扱う「現代の国語」では、評論を読むことに苦手意識のある学習者にとって、先にマンガという具体性の高い教材を与え、ある程度考えを形成できる状態にしておくことは、リメディアルの観点から有効性が高い。一方、OECD（経済協力開発機構）によるPISA調査の「非連続型テキスト」における価値や、大学入学共通テストに見られる国語科教育におけるリテラシーの潮流からは、マンガが複数のテクストを読み取る能力を伸ばす可能性がある。また、読みの交流では、大勢の人前で自分の考えを述べることができる力や聴衆として聞く力といった「話すこと・聞くこと」領域の能力に注目することもできる。このように、学習者につけたい力とマンガの教材としての価値の関係性が複数考えられることから、マンガのテクスト一覧からその特性を概念化するときには、学習者の発達段階（校種）にどのようにアプローチするのかをふまえて考察する必要がある。

本研究は、筆者の受け持ちの学習者が自分の読みに自信を持つことができず、読みの交流をしようとしても大勢の人前で自分の考えを述べることに抵抗感があり、発言できない状況を改善したいというところからスタートした。短大の二年間、それも半年間の科目の中でこのような状況から抜け出すために、教材そのものを転換することで学習者の意識改革を行う必要があると考えた。その結果、文章教材による先行研究の成果の取り扱いが希薄になり、マンガの特質を十分検討しない状態で研究を進めることになった。対象となる学習者の範囲を拡大して、マンガが国語教育全体にどのように位置づけられるか、どのような学習目標において教材としての適性があるのか整理することが今後の課題である。

＜文献 ＞

かとうひろし（2014）『初心者のためのマンガの描き方ガイド　マンガのマンガ　コマ割りの基礎編』銀杏社.

倉澤栄吉(1974)『国語教育講義－新時代の国語教育を中心に－』新光閣書店.
佐藤弘毅（2018)「短期大学の衰退と再起への道」安部恵美子・南里悦史『短期大学教育の新たな地平』北樹出版,pp.12-42.
佐藤学（1995)「学びの対話的実践へ」『学びへの誘い』佐伯胖,藤田英典,佐藤学,東京大学出版会,pp.74-75.
鶴田清司・河野順子（2012)『国語科における対話型学びの授業をつくる』明治図書.
桃原千英子（2010)「入れ子構造を持つ文学作品の読解」『第118回全国大学国語教育学会大会研究発表資料集』全国大学国語教育学会,pp.49-52.
西田太郎（2019)「学習者に獲得される『空所』概念の検討と実践化」『国語科学習デザイン』第2巻第2号,pp.76-86.
羽田潤（2019)「マルチモーダル・テクストを活用した国語教育の研究－「グローバルチャリティキャンペーン」(“Doing Ads”,EMC,2008）を中心に－」『大分大学国語国文学会国語の研究』44,p.14.
町田守弘（2009)『国語科の教材・授業開発論―魅力ある言語活動のイノベーション―』東洋館出版社.
松本修（2015)『読みの交流と言語活動　国語科学習デザインと実践』玉川大学出版部.
W.イーザー著・轡田収訳（1982)『行為としての読書－美的作用の理論－』岩波書店.